

---

# ここにいるよ。

雪乃 静

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ここにいますよ。

### 【Nコード】

N5869J

### 【作者名】

雪乃 静

### 【あらすじ】

この物語は『 YOU 君に会いたくて 』の続編になります。

修司と保坂はちょっとした不思議に遭遇しました。

「あの店でいいんじゃないか？」

久し振りに会った保坂が指差した。

「そうだな」

旅先で見付けた、繁華街から少し外れた場所にポツンと一軒だけある、何処にでもあるような何の変哲もないスナック。

“ルイーベ”と書かれたそのネオンに私達は吸い込まれて行った。あれから二十年。長かったはずの時間は、過ぎてみると昨日のこのように短く、私も保坂もともに五十を過ぎていた。

以前に比べてだいぶ変わってはいるが、ここはかつて私達のよく知る街だった。

「いらつしやいませー」

元気のいい若い娘の声。昔、私はこんな声を毎週聞いていた。

この店の店は、もう何度も訪れている。しかし、このような声に出迎えられるのは、あの頃以来だった。

なんとも言えぬ懐かしさと心地のよい響き。

「ごめんなさい、カウンターでもいいですか？」

「あ、ああ……」

保坂が答える。

…なんだ？

……。

その後ろで、私はこの一見いちげんの店内を見渡していた。

その空間は、かつて私達を通った店の店内によく似ていた。壁に掛かる額入りの絵画は異なるものの、フロアのカーペットの色と模様、カウンターとテーブル席の配置などは瓜二つと違ってよかった。偶然なのか、それともこの店内の配置がよくある配置だからなのか、この店の店内は本当によく似ていた。

「どうぞこちらへ」

その声が私達をカウンターへと導く。

「おい、見てみるよ。…あの娘」

導かれようとする私の前で、不意に立ち止った保坂が顎で指した。えっ…。

カウンターに視線を注いだ私は、その瞬間に、まるで夢の世界にでも入り込んでしまったかのような錯覚に陥った。

「なっ、似てるなんてもんじゃないぜ」

「あ、ああ……」

平常を装い、言われるままに私はカウンター席に着いたものの、

その動揺が消えることはなかった。

「どうしたんですか？」

おそらくそんな私の動揺を感じ取ったのだろう。笑顔と明るい声で話しかける彼女の顔に、一瞬の戸惑いが見え隠れした。

「二人とも」

二人とも？

私は右にいる保坂の顔へと視線を向けた。

…なるほど、確かに。

じゃあ…、さっきのは立ち止ったんじゃない、固まったたのか。

「はい」

相変わらぬ笑顔と明るい声で、カウンター越しに彼女がおしぼりを左右の手に一枚づつ器用に広げる。

『ありがとう』

「…あの、私、なにか変ですか？」

私達の彼女を見る目が異様だったのか、彼女は戸惑いを表に現した。

「あ、いや、そうじゃないんだ。ちょっと知ってる人に似てたもんだから、つい」

「なんだ、そうだったんだ。あービックリした」

『ごめんな』

きっかけなんてものは、案外、簡単につかめてしまうものなのかもしれない。私達はこのから様々な話に時を忘れた。その中で私はいくら似ているとはいえ、会ったばかりの、しかも会おうとしなければ二度と会うこともないであろうこの若い女性に、何故か本来ならばそれ以上話す必要のない過去、すなわち優和との関係と、そして優和への想いまでも話していた。

「そうか…。そんなに似てるんだあ…」

「でも凄いですね。それで今でも独身でいるだなんて」

彼女の名は由奈。しかし、私を見るその微笑みは、まさしく優和そのものだった。かつてクリスタルのような声という在り来たりな

表現をしたその声も、瑞々しく艶やかで、張りがあってそれでいて柔らかそうな唇も、白くて細い、しなやかでいて可愛い指も、その全てが優和そのものだった。

「優和はもういないんだ、ただ似ているだけなんだ」と思いつつも、私は年甲斐もなく、この由奈という名の優和に魅かれていった。

「俺は独身の方が気兼ねがなくていいからなんだけどな。どうもこいつは未だにその娘のことを引きずってちまってて駄目なんだ。もう二十年にもなるっていうのによ」

「私初めて会いました。いるんですね、そういう人って」

「こいつは特別なんだよ」

「おい」

「でも私は嬉しいな。そんなに想って貰えるなんて」

「おもくないか？」

「そんなことないですよ。私だったら、口では『私の分までいい人を見付けて幸せになってほしい』なんて言っても、やっぱり内心では『自分のことも忘れないでいて』って思いますもん」

「そんなもんかねえ」

「そんなもんです。あくまでも私の場合ですけど」

「ハハハハ、そうなんだよ。それでな、俺は独身の方が気兼ねなくていいからだったんだけど、こいつは未だにその娘のことを引きずってちまってるんだ。もう二十年だよ二十年、信じられるかあ？」

「いやー、それにしてもほんとビックリした。ほんとそっくりなんだ、昔俺等が惚れてた女にさ」

「それでこいつは未だに優和のことを引きずってるんだよなあ」

「由奈ちゃん、ほんと似てるよ、優和に」

「昔な、もう二十年も前になるかなあ。俺等はね、優和という女性に惚れてたんだ…」

年を重ねると同じ話題を繰り返すようになる。酒の力も手伝わってか、私達ももう何度繰り返したことだろう。由奈の微笑みは穏やかな時間とともに、そんな私達を優しく包み込んでくれていた。

「そっか、修司さん、かあ…。修司さん、修司、修司、修司、修司、修司」

パチン！

「シュジシュジ」

「中山さん、シュジシュジね」

「う、うん」

「私、優和。藤井優和。よろしくね」

「シユジシユジ、乾杯しよ？」

「う、うん」

「じゃあ、せーの。かんぱーい」

「乾杯」

キン。

「…やっと優和の顔、見てくれたね」

「シユジシユジ、ずっと下ばかり見てたから…」

「そ、そんなことないよ、ずっと見てたよ」

「そお？」

「乾杯しよ？」

「また？」

「うん、また」

「うん」

『かんぱーい』

キン。

「すごい。シユジシユジ、歌、上手いんだね」

「ねー、私も歌っていいーい？」

『いいともー！』

「ねえねえ、今井つてのはどお？」

「今井かあ…。うん、いいかも」

「ほんと？ じゃあ、シユジシユジへの電話は今井で掛けるね。忘れちゃだめだよ。真ちゃんにはこの名前は使わないから」



「おなか空いちちゃったの。ちょっと待っててね」

「どこ行く？」

「いつ見てもでっかいよねー。って、そう簡単にコロコロ変わんな  
いか、家だもん」

「ヤクザ御殿てさあ、本当にヤクザいるのかなあ」

「うっわー、ベントだ。やっぱりヤクザ屋なんだ」

「ここに止めたら冷やかされちゃっつよ？」

「あー、みんな、やきもちやいちゃってるよー」

「彼女作れよー」

「シユジ、ちゃんと食べて」

「いいい、おもいつきり回しちゃだめだからね。分かってる？ シ  
ユジ、真ちゃん」

『分かってる分かってる』

「ちよ、ちよっとお、シユジ？ 真ちゃん？」

『イエーイ』

「だめー、止めてー」

『ひゃっほー』

「キヤー」

『ふうふうー』

「お願い、止めてー」

『うおー、ほっほっほおー』

「やっと一緒にリフトに乗れたね」

「うん」

「あ、そうだ、アメなめる？」

「うん」

「ちよっと待っててね」

「なにが出るかな、なにが出るかな、それはドロップまかせよ」

「手、出して」

「あっ、メロン味」

「はい、あーん」

「わっ、シユジのほっぺ、冷たーい」

「ね、私は？」

「すっごく冷たい」

「って、アメあるの分かるぞ。ホラ」

「へへへ」

「霜焼けになっちゃうぞ」

「大丈夫。そしたらこうやって温めてもらっつから」

「シユジの手、あったかーい」

「シユジ、元気？」

「ごめんね、電話しなくて」

「ねえ、クリスマスにみんなが集まらない？ あそぼ？」

「ねえ、聞いてる？」

「聞いてるよ」

「そお？ よかったー。怒ってるんじゃないかって、ちよっぴり思ったから」

「怒ってなんかないよ。そうかクリスマスかー。いいねえ、遊ば遊ば。で、二十四？ 二十五？」

「うーん、二十四がいいな、イブだから。ロマンティックでしょ、イブの方が」

「本番は、二十五だよ」

「前祝いよ、前祝い」

「あつ、もしかして好きになっちゃった？」

「どこ行く？」

「何処でもいいよ」

「じゃあさ、海に行こ？」

「海でいいの？ 海ならいつでも行けるじゃん」

「今日の海が見たいの。だめ？」

「うっわー、すっごーい。ドドドドドーンだって。怒ってるよー」

「ねえねえ、見て見て、船だよ船。遠いーねー。どこから来たのかなー」

「おーい」

「あつたかいね、このポケット」

「あつたかいつて、このポケットのことか？」  
「そうよ。どこのブランド？」  
「えっと、ミスター・シユウジ。かな？」  
「ふーん、そっか」  
「そっか、って…。あのかなー」  
「うそうそ。うそだよ、ごめんね」

「あー、ドキドキしてる」  
「そ、そんなことないよ」  
「そお？」  
「そお」  
「ふうん」  
「な、なに」  
「んーん、なんでもない」

「…ずっと、こうしていたいな」  
「あ、そうだ。写真撮ろうか」  
「…うん」

「綺麗だね。もう、見られないと思ってた…」

「ちょっと、ちょうだい？」  
「ハー、おいし」

「あ、あのを…」  
「ん？」  
「…帰ろうか」

「…そうだね」

「…家まで送るよ」

「…ううん、…駅でいい」

「…じゃあ、…またね」

「優和！」

「…ごめん、ごごでいい。…ごめんね、修司」

「あつ、ごめんなさい。私…」

「…優和」

「…しゅう…じ？」

「…修司、会いたかった」

「どこ行く？」

「だいら平に、行く？」

「いいけど、だいら平に行っても…」

「お願い。あの路肩に連れてって」

「…分かった」

「…着いたよ」

「うん」

「ねえ、夜景、見える？」

「…うん」

「綺麗？」

「…うん」

「『うん』ばっかだね」

「うん」  
「ほら」

「…修司」

「あのね…、私…」

「優和。俺、優和が好きだ。ずっとずっと、好きだった。…初めて会った時から、ずっと」

「…今まで言えなくて、ごめんな」

「…嬉しい」

「…やっと言ってもらえた」

「…よかったあ」

「ずっと…、待ってたんだよ…」

「あつ、修司の心臓の音、聞こえるよ」

「うん」

「見えてきたよ、“止まれ”の十字路」

「うん。じゃあ、この辺でお願い」

「じゃあ、電話するね」

「本当にここでいいの？ 家の前まで送るけど」

「ありがとう。でも、ここで大丈夫だから」

「ごめんね。…朝帰りは、…やっぱりね」

「…車に、…気を付けるよ」

「うん」

「あー、もしかして淋しい？」

「当たり前だろ」

「すぐに会えるよ」

「もしもし。優和だよー、おかえりー。今日、どうだった？」

「しゅーじー」

「優和が…、…優和が死んじゃった…」

「今、病院にいるんだけど…」

「修司、大丈夫だよ。ちゃんと待っていていられるから」

ハッ。

夢を見た。

由奈に触発されたのか、走馬灯の如く、昔のことが流れていった。

カーテンの隙間から、朝の光が射し込んでいた。

「うーん。この辺も随分変わったなあ……」

辺りを見渡しながらボソツと口にした保坂の言葉は、この街がもう、私の知る街ではないことを改めて感じさせた。

歳月は、ある物には素早く、そして、またある物にはゆっくりと、当時の面影を残しながらも、しかし確実に変化を与えている。

かつて知つたるこの街は、私の“帰郷”の意に反して、初めて訪れた街のように、私を他人行儀に客としてしか受け入れてはくれないように思われた。

駅前ロータリー。優和と待ち合わせた“DONDONドーナツ”のあつた百貨店の入り口は“コーヒーコーナー”からバーガーシヨップへと変わり、その百貨店も名前とともに様相を変えていた。平屋の駅舎も駅ビルになっていた。

「ごめんなさい、遅くなりました」

「ハアハア」と荒い息遣いとともによ奈は現れた。

胸元にフリルがついた白のカットソーに白のパンツ。相変わらず優和そのものでありながら、昨夜の白のブラウスと白のスカートとはまた少し違った雰囲気なのは、きっとこれが仕事とプライベートとの差ということなのだろう。髪型には目立つた変化はないものの、メイクはナチュラルな感じに変えているようだ。

そういえば、優和はいつでもナチュラルだったなあ……。

優和と由奈の違うところ。そのほかにも優和との相違点は幾つかあつたが、それでも優和そのものと言えた。

それにしても、似合っているからいいのだが、「よほど白が好きなんだなあ」と思わせるほどの二日続けての白づくめ。なのに何故



か靴だけは違う色というのは、これが今の若い娘のコーディネートというやつなのか？ 昨日は黒とシルバーにリボンが付いたものだったし、今日は水色のキャンパスだ。もつとも、これで靴まで白だったら、かえっておかしくなるのだろうか…。

所詮、確かそう呼ばれていたような気がするだけで、本当にこの服がカットソーと呼ばれる服なのかどうかも定かではないファッションに無頓着な私の感想だ、当てにはならない。

「いやいや、俺達の方こそ悪かったねえ、こんなに早くから。眠いでしょ？」

「あ、いえ」

「私は全然大丈夫です」

私達のもとに着くなり胸に手を当てて呼吸を整えていた由奈は、恐縮そうに両の手のひらを胸元で小刻みに振った。

「お二人の方こそ」

「私なんかよりもずっと眠いですよね」

「なのにお待たせしてしまって、本当にごめんなさい」

「ハアハア」しながら本当に申し訳なさそうに、由奈は眉間を寄せて何度も頭を下げた。

世間では決して早いとは言えない午前十時。しかし我々二人に四時過ぎまで付き合っていた由奈にとっては、やはり早い時間のはずだ。確かに私達も「眠い？」と訊かれたら、そりゃあ眠い。でも私達の場合は、由奈にうつつを抜かし時間を忘れた結果なのだから自業自得というもの。それなのに、たった五分にも満たないほどの遅刻で私と保坂を気遣うなんて、逆にこっちが恐縮してしまう。

『いいんだよ本当に』

そんな由奈の姿に、今度は私と保坂が胸元で両手を小刻みに振る。「まー、なんだ、いつの時代も、男は待つもんだからな」

自分の言葉に酔い痴れるかのように保坂は二度頷くと、「ちょっと休憩」と言っただけのベンチへ歩いて行った。

私同様、保坂も由奈の呼吸が落ち着くのに、もうしばらく時間が

必要だということを察知していたのだろう。

「行こうか」

保坂に合わせて頷いていた私も、その後が続いて由奈を先導した。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

「はい」

微笑む保坂に、すっかりもとの呼吸に戻った由奈がベンチから立ち上がり元気に頷く。

「おっ、元気いいな」

保坂が立ち上がる。

「じゃっ」

そして私。

「行きましょ？」

先に行く保坂の後ろで、私の手はニコッと私を見上げた由奈の手に引っ張られた。

「じゃあ、平でもいいですか？」

「平かあ、懐かしいなあ」

「行ったことあるんですか？」

「行ったもなにも、中ちゃんも俺も、昔この街に住んでたんだよ」

「えー」

「昔は土曜の夜になるとよく行ったもんでね。そこで中ちゃんとも知り合ったんだ」

「毎週違う彼女を隣に乗つけてたよな」

「おい、毎週はないだろ。たまにだよ」

「へー、保坂さんてモテたんですね」

「でもエッチ」

「おいおい、由奈ちゃんまで…」

「『ここからの夜景は、彼女をベッドに誘ったための前戯』だったっけ？」

「それを言うなって…」

「いやあん、保坂さんたら前戯だなんて」

「由奈ちゃん…」

保坂をからかう由奈だったが、私にはその頬が微かに色付いたように見えた。

「中山さんは？」

「俺？俺は…」

確かに平には優和とDONDONで待ち合わせて何度も行った。

しかしそのことは私と優和の秘密だったから、保坂は未だに知らないはず。

どうしよう…。

「こいつはゼミの仲間と走りに来てたんだ」

返答に困っていると、幸運にも保坂自ら助け船を出してくれた。

「こいつら何度もからかうもんだから、しまいには頭にきてな、こいつらの車を追っかけたんだ。もう隣に乗ってる彼女そっちのけで平のパーキングで大喧嘩だよ」

「凄かったよな、あの時は」

「ああ」

保坂はしみじみと頷いた。

「ま、でも、それがきっかけで今があるんだけどな」

そしてニコツと由奈に笑みを見せた。

「いいですね、男の人って」

「なんで？」

「だって、そうやって喧嘩がもとでも、お二人のように仲良くなれるんですもの」

「俺達はまれなケースなだけさ。男同士だからって、普通はこうはいかないよ。それにこの歳になると、ただの腐れ縁だしな。なっ、中ちゃん」

「そうそう」

「まっ、お二人ったら」

由奈が微笑む。

「でもお二人を見てみると、ほんと羨ましいです」

『そうか?』

「ほら、息もぴったり」

『あ…』

「ね」

ニコツと首を傾けた由奈は、大きく息を吸い込むと、「あーあ」と吐き出した。

「私もそういう友達が欲しかったなあ」

「いないの?」

「はい」

「私には友達と呼べる人自体がないんです」

「そうなんだあ…」

「ま、でもほら、今に由奈ちゃんにも俺と中ちゃんのような、そういう友達が絶対現れるから」

「そうですね」

由奈は終始笑顔だった。その笑顔と明るさは、「友達がいない」と答えた時でさえ変わることはなかった。それは決して強がりからでも誤魔化しからでもない、彼女の本心からくるように思われた。

「そうかあ。じゃあ、お二人は大学生の時からのお友達なんですね」

「まあね。でも大学は別々だったんだよ」

「へー」

「なのに就職した会社が偶然にも一緒だね」

「えー、じゃあ、ビックリしたでしょ」

由奈がカウンターに身を乗り出した。

「そりゃあ、ビックリしたよ、研修にいるんだもん。」  
「そうそう、お互い『なんで?』ってな」

私は保坂を、保坂は私を指差して大袈裟にのけぞった。

「それで研修の時に会ってビックリしたたる、なのに配属先でまたビックリさ。」

「配属先も一緒だったんですか?」

「そうなんだよ」

「へー、凄いですね」

「でもさらに驚いたのは、俺も中ちゃんも同じ女を好きになったんだ」

「優和さんですね」

「そうそう。もっとも、俺は途中で挫折したんだけどな」  
保坂が笑う。

「えっ、じゃあ、もしかして中山さんの話の舞台って、ここ?」

「ああ」

「そうかあ…。じゃあ、平も思い出の場所なんですよ? あそこはデートスポットですもんね」

「今もそうなの?」

「たぶん」

「たぶん?」

「私、デートはお二人が初めてだから…」

まだ私と保坂が、同じ話題を何度も口にするようになる少し前のこと。二対一の変則ながら、私達は“デート”の約束を結んでいた。

「へー、ここも変わったのかあ」

運転席から保坂がフロントガラス越しに見上げた。

私達の車は山頂への入り口になる交差点で信号待ちをしていた。山頂へはこの交差点を右折する。

おそらく“よそ者”の誰もがそう呼んでいたであろう建物。通称“ヤクザ御殿”。私を始め、全国各地からこの地にやって来た学生達、すなわち“よそ者”が、いつの頃からか名付けた呼び名。山頂への入り口の目印になっていたその建物も、今は高層マンションにすっかり様相を変えている。

この交差点も山頂への入り口も、大きく広がり、今はもう昔の面影を残してはいない。

もう三十年以上前になる。あの頃私は確かにこの道を走っていた。平<sup>だいら</sup>の山頂へと、この入り口を通っていた。

その幻影が当時の交差点とともに甦る。

夏草や

兵どもが

夢の跡

その頃の私には、奥州藤原家の夢も野望も、源義経のような大それた夢などもなかったが、様変わりしたこの交差点に、何故かそんな芭蕉の句を思い浮かべた。

「うつわあー、きれえー」

展望台の欄干から身を乗り出した由奈は、バランスをとっては足を宙に浮かせたり、つま先立ちになったりを繰り返した。

緑の中の白。青く聳える富士。黒の中に時折輝きを見せる港の海面。平<sup>だいら</sup>は私達に一見何も変わらない不朽の風景を映し出しているが、二十年の歳月はそれさえも微妙に変えていた。住宅地の白は大きくなり、港の黒は小さくなった。ビルが密集する市街地は、その白よ

りさらに白く、そして強く、太陽の光を反射している。

仕方のないことながら、それはやはり私の知る風景とは趣を少し変えていた。

リニユールされた山頂。駐車場の配列、土産物を扱う売店、テレビやラジオの電波塔。昔の山頂を知る者にはここもまた、違和感を生む場所ではなかったが、それらが逆に新鮮さを感じさせていたのも事実だった。

「でも、前に来た時となんか違う…」  
ん？

由奈の視線が落ちた。何故かもの思う横顔。

「そりゃあ、何年も経てば変わるさ。なんたってパパに連れて来て貰ったのは、まだ由奈が小さい頃だったんだから」

「そうですよね」

満面の笑顔を保坂に向けると、由奈は再び欄干にバランスをとった。

「あー、でもなんか不思議です」

「なにが？」

「だってほんとは昔と違っちゃって淋しいのに、それが逆に初めて来たみたいで楽しいんだもん」

へー、由奈みたいな若い娘でも、そんなふうに感じるもんなんだあ…。

まっ、そうだよな。今は新鮮とさえ感じるこの山頂だって、日本の原風景とはよほどかけ離れた、癒しからもほど遠い、まさに対極の位置にある、人間が人間のために造り出したある意味技術の結集体とも言えるあのビルの立ち並ぶ街だって、もしかしたら、百年、二百年と経つうちには、日本の原風景として位置付けられているかもしれないんだから。

今は昔、かあ…。

流れてるんだよな…、時は…。

「あの…、後で夜景を見に来てもいいですか？」

『いいとも』

揃った懐かしの言葉に、私と保坂は顔を見合せた。

山頂からロープウェイで久能山に渡り、東照宮を観光した後、再び平<sup>だいら</sup>に戻った。

いつの時代にも、歴史に興味のある若い娘は少ない。なのにこの年頃の娘にしては珍しく、由奈はここで思いのほか時間を費やした。歴史に興味を持つ私よりも遙かに長い時間、由奈は徳川家康の遺品や古文書などを食い入るように見ていた。その時の横顔は、私に彼女との興味の共有を感じさせ、喜びを湧き上がらせるほどだった。

ゴールデンウィーク頃なら眼下の石垣いちごのいちご狩りもしいところだったが、夏休みでは到底無理というもの。よって、またの機会とした。

「あの信号を右に曲がって下さい」

由奈が遠くに見える信号を指差した。

あそこは…。

そこは、かつて優和とよく海を見に行った砂浜への入り口だった。「あの交差点って、確か大学の入り口だろ？ なにか用でもあるの？」

ハンドルを握る保坂の意識が由奈に振り向いた。

「じゃーん。実は私、その卒業生なんです」

「へー、そうなんだ。じゃあ、由奈ちゃんて、中ちゃんの後輩かあ」「えー、そうなんですか？」

シートとシートの間から顔を出した由奈の驚きの目が私に注がれる。

「あ、ああ」

なんとという偶然。ただでさえ優和に瓜二つなのに、そのうえ自分



と同じ大学、しかも同じ学部を出ているなんて。

私は由奈の驚きにはあえて微動だにせず、ただ正面の流れる景色を見つめていたが、実は内心では目を丸くし由奈に振り向かんばかりに驚いていた。

「じゃあ、中山さんも海洋実習したんですよね。私、凄くしんどかったんですけど、中山さんの頃ってどうでした？」

「うーん、確かにしんどかったなあ。船は揺れるは、船酔いはするはで、慣れるまでは実習どころじゃなかったなあ。」

「そうそう、船酔いしても降りられないし、ほんと慣れるまでが辛いんですよ」

「ただでさえ実習なんて面倒臭いのに」

「そうそう」

「それに、女子はともかく、男子は結局、一週間風呂にも入れなかったし」

「そうなんですか？ 私の時は男子も入れてましたよ」

「へー、やっぱり変わるもんなんだなあ。あ、でも、自由時間にサメを釣ったのはいい思い出かな」

「えー、サメ釣ったんですか？ 凄ーい」

「由奈ちゃんは釣りとかしなかったの？」

「見てただけです。でも、全然釣れなくて」

「まっ、そういう時もあるな、釣りは」

「好きなんですか？」

「いや、好きというほどじゃないけど、何度かやったことはあるよ。やっぱり釣れない時もあるんだけど、その釣れない時もまた楽しかったりしてな」

「それって、すでにハマってますん？」

「あ、そうか」

「おいおい、相変わらずだな、中ちゃんは」

笑いとともには交差点を右折した。

「じゃあ、あの砂浜も知ってますね」

「砂浜？」

「はい。八号館のそばの」

「あー、うん」

「あの砂浜いいですよ。ドドドドドドッって波が砕けて」

「私ね、あそこに行くたびに思うんです。』うっわー、怒ってるよ

ー』って」

「そ、そうだね」

「ですよ」

『うっわー、怒ってるよー』か…。

そういえば、優和もそう言っていたなあ。

懐かしい言葉だった。

「『怒ってる』かあ。いい表現だ」

保坂は由奈のはしゃぎようと波の表現に笑いを噛み殺していた。

「えっ、変でした？ 私」

『とつても良かった』

松林を横断する全長五、六メートル程の小径こみちを抜けると遊歩道に出る。由奈の言う砂浜へはその遊歩道にある階段を下る。

「うっわー、今日も元気だねー。ドドドドドドッだって、やっぱり怒ってるよー」

由奈は裸足になると駆けて行き、波と戯れ始めた。

…優和。

現実が錯覚になる感覚。由奈が優和として本物になった瞬間。

外見だけではなく、波と戯れるその仕草と様は、まさしくあの時の優和だった。

あの頃の気持ちは蘇る。あのやるせなくも愛しく想う、毎日がドキドキしていた頃の感情が。

そうか…。

私は優和を愛しくは想うものの、もう何年もこんな気持ちになっ

たことはなかった。体の奥の方から、心の奥の方からどんどん湧き上がる、理屈ではどうすることも出来ないあの感情を、私はそんなあの頃の感情を、今でも変わらず心に持ち続けていると思っていた。しかし実際は頭で考えるようになっていただけで、優和を想う私の気持ちは、いつの間にか形を変えてしまっていたようだ。

あれほど誓ったのに…。

あれほど誓ったはずの私は、いつの間にか優和を思い出にしまっていた。

一瞬の出来事。そんな由奈の一瞬に、自分が今まで自己満足に浸っていたにすぎなかったことを知った。

年甲斐もなく私達は由奈の後を裸足になると、波打ち際を三人で楽しんだ。

波は温く、夏の陽射しがモヤシのような私の軟弱で白い肌を突き刺して赤にする。その温い海にやはり何処か違和感と抵抗を残すものの、それでも服を濡らすほどに水をかけあった。唇に伝う塩辛さに久し振りの海を感じる。

そういえば、優和とは一度もこんなことしたことがなかったなあ…。幼い頃、あれほど好きだった海を、私はいつしか避けるようになっていた。水の温さと体に纏わり付くような独特のヌルみ、そして濃すぎるまでの塩辛さが、大人へと成長する過程で私をそうさせたのだろう。だから優和と来た時も、決して水に浸かることはなく、ただ一人で波と戯れる優和を眺めるだけだった。

あんなに来てたのに…。

「あー、楽しかったあ」

「こんなに楽しいのはほんと久し振りです」

由奈が私達を見上げる。

「いやあ、そんなに喜んで貰えると俺達も嬉しいよ。なあ、中ちゃん」

「ああ」

湿った服を乾かすべく、私達は砂浜を漫ろ（そぞ）歩いていた。

「そうだ、記念写真撮ろうか」

保坂はポケットから小型のデジカメを取り出すと、私と由奈に小刻みに振った。

ん？

「どうした？」

一瞬見せた由奈の曇った顔を私は見逃さなかった。

「写真、嫌いか？」

「あ、いえ、そんなことないです。好きですよ、写真。でも出来ればこれで撮ってほしいんですけど…、だめですか？」

由奈が自分のカメラを保坂に差し出す。

「へー、フィルムカメラかあ。今時珍しいなあ」

「わがまま言ってますいません」

由奈は本当に申し訳なさそうに保坂と私に頭を下げた。

「あ、いや、いいんだ。」

「そうそう。カメラだったらどれでもいいさ」

「本当にごめんなさい。私、デジタルが苦手なんです」

「なんか違いでもあるのか？」

「いえ、なんとなくなんです」

「なんとなく？」

「はい」

「ふううん」

保坂が微笑む。

「えっ、私変ですか？」

「少しな」

「えー」

由奈の陽に焼けて赤くなつた頬の色が増した。

流木を三脚代わりにポーズをとる。由奈を真ん中に、その脇で二人のオヤジがとびつきりの笑顔を作つた。

カメラにピースを作る由奈。セルフタイマーが「あと少し」を告げる。

ところで、今さらなのだがこの絵面<sup>えまへ</sup>は、他人にはどう映っているのだろうか。私と由奈、あるいは保坂と由奈の二人なら、親子として認識されるだろう。しかし五十過ぎのオヤジ二人と若い娘の取り合わせなのだ。由奈は嫌がりもせずに私達に付き合っているが、もしかしたら好<sup>よ</sup>くは見られていないかもしれない。なのに…。

まったく不思議な娘だ…。

私はそんな由奈に視線を落とすと、シャッターが下りる少し前に視線を戻し、とびつきりの笑顔となつた。

「今度はいつ来られます？」

「いつかなあ」

「じゃあ、いつ来てもいいように、ちゃんとプリントしておきますね」

空が青からオレンジに変わった。

「もうすぐですね」

「ああ」

由奈のリクエストに応えて、私達は再び平<sup>たいら</sup>の山頂に来ていた。やがて地上に広がる銀河を求めて。

その光は本来罪深きものなのかもしれない。しかし人々はその光

にときめき、そして恋しがる。それは私達も例外ではなかった。

「あー楽しみだなあ。早く暗くならないかなあ」

「私ね、ここから見るの初めてなんです。いつも明るいうちに帰ってたから」

「見に来ようと思えば来れたんじゃないの？ そんなに遠くないでしょ？」

「一人でですか？」

「あつ、そうか、すまん」

「いいえ、気にしないでいいですよ」

なんとという失態。失言。由奈同様、ここからの夜景に浮かれていとはいえ、私は知っていたはずの話題を口にしてしまった。なのに由奈はそんな私に気にする素振り一つ見せず、それどころか笑顔さえ見せてくれる。

私は優和だけでなく、この娘にも気を使わせてしまっている。

こんな歳になってもまだ…。

夜の帳が下りると、銀河は隆盛を極めた。

「ほんとにここでいいのか？」

「はい」

「時間も時間だし、家まで送るぞ」

「ありがとうございます。でも本当にここで大丈夫ですから」

「そうか。じゃあ、ほんとに気を付けてな」

「はい。みなさんもお気を付けて」

『ああ』

「また遊びに来て下さいね」

『もちろん』

「絶対ですよ。待ってますからね」

『ああ』

「じゃあ」

『じゃあ』

私達を背に、由奈は改札を抜けた。

「あー」

周りが振り向くほどの大きな声。

『んー？』

「また会いましょー？」

私達に届けとばかりの大きな声で、由奈が大きく手を振りながら微笑んだ。

『また会いましょー』

私達の声はもしかしたら由奈には届かなかったかもしれない。それでも私と保坂は両手を振って由奈の笑顔に精一杯応えた。

駅の改札を挟んでの別れ。再会を信じて、「さよなら」は誰も口にすることはなかった。

そういえば…。

「また会いましょー」って、いつかも聞いたことがあったなあ…。いつだっけ…。

それがいつだったのか、私は思い出すことはなかった。

「綺麗だね。もう、見られないと思ってた…」

平だいらから見下ろす瞬く銀河に紛れてしまいそうな声で、由奈は確かにそう言った。

昔、優和が言った言葉を。

「いらつしやーい」

ほぼ一年ぶりの“ルイベ”だった。もう一度会いたいと思いつながらも、毎日の忙しさにかまけて、気が付くと、あの時と同じ季節になっていた。今日も仕事のついでで立ち寄ったままで、仕事が出来ればさらに季節は流れていたに違いない。

「なににします?」

「ビールを」

由奈は? と、ママが用意をしている間に、それとなく辺りを見渡してみる。知らない顔ばかり。

「中山さん ですよね」

「はい?」

不意に名前を呼ばれ振り向くと、ママがグラスにビールを注いでいた。

「ああ、こりゃどうも」

注がれたビールを一気に飲み干すと、ママは微笑みながら二杯目を注いだ。



「驚きましたか？」

「ええ。名前、覚えてたんですか？」

「覚えていたというよりも、覚えさせられたってところかな」

「覚えさせられた？」

「ええ」

「ちょっと待ってて下さいね」

詳しくはこれから話すとはかりにママは手のひらをおもむるに突き出し話を中断させると、奥にある部屋へと姿を消した。

「覚えさせられた」とはどういうことだ？

「ごめんなさいね、話を中断させちゃって」

私はその言葉の意味を考えていると、ほどなくしてママは一通の封筒を手に現れた。

「実はこれを預かってたの。由奈ちゃんから」

茶の封筒を私に手渡すとママは続けた。

「でも由奈ちゃんね、『今度中山さん達がみえたら渡して下さい』って言って、その日に辞めちゃったの」

え？

「もう一年近くになるかな」

「これは？」

「写真」

「写真？」

…ああ、そういえば。

「それで私の顔と名前を覚えてたんですね」

「そうなの」

「見てもいいですか？」

「どうぞ」

封筒からは去年撮った由奈とのスリーショットの写真が二枚出てきた。

これは…。

「よく撮れてるでしょう。珍しいんですよ、あの娘が写真を撮らす

なんて。中山さん達が初めてなんじゃないかな。他のお客さんにはどんなにせがまれても絶対に撮らせなかつたから」

「ママ…、この娘って…」

「どうかしました？」

「あ、いえ…」

この娘は誰だ？

確かにその写真は女性を真ん中にして私と保坂がとびっきりの笑顔を作っている。しかし私と保坂の真ん中でピースをしているこの女性を私は知らない。清楚な中に幼さが残り、可愛くすら感じる綺麗な娘ではあつたが、優和とはまったくの別人だつた。

「あー、もしかして由奈ちゃんの顔、忘れちゃつたとか。だめですよ、一年ぶりだからって、貴重な一枚なんですから」

「そんなことはないんだけど…」

「隣、いいですか？」

落ち着きのある、品の良さを感じさせる声に見上げると、さつきまでカウンターの隅で、一人、グラスを傾けていた初老の男性がグラスを片手に微笑んでいた。

その横顔は異なるものの、彼は私がこの店に来た時からずっと、まるでシヨーン・コネリーを思わすかのような渋い雰囲気を漂わせていた人だつた。そして改めてその声を耳にした私は、「なるほど、声もシヨーン・コネリーだ」と、その渋さに納得させられた。

「どうぞ」

男ならおそらく誰もが目標とも憧れともするであろうこの渋さ。

こういう人を本当のロマンスグレーと言つんだらうな。

自分には到底身に付けることの出来ないこの渋い雰囲気を持つ彼を、私は会釈で歓迎した。

「では、お言葉に甘えて失礼」

彼は微笑みながら持っていたグラスを軽く掲げると、そのグラスをカウンターに置き、適当な位置まで引き出したイスに座つた。

誰もが行う動作なのに、彼の振る舞う様には実に品があり、格好

いいとさえ思える。

グラスを一口傾け、それをじっくり楽しむと、彼は私に微笑みかけた。

「私にも、見せて頂けませんか？」

「ど、どうぞ」

どうも私は彼の微笑みに弱いようだ。私はこの初めての人に、まだ一度もノーと言っていない。べつに拒むことではないのだが、彼の微笑みには私にノーと言わせない何かがあるような気がした。

「では、ちよつと失礼して」

彼は封筒の上に置かれたもう一枚を手にする、私が手にする一枚と見比べてから、自分の手元に視線を落とした。

「で、あなたにはどう映ってますか？ この娘は」  
え？

突然の的を射た問いかけに、私は驚きを隠せなかった。私が疑問に思っていたことを、彼はまるで知っていたかのように、手にした写真を見つめながら質問してきたのだ。

動揺した私は言葉が出なかった。

「違うんですよね。あなたの知っている由奈ちゃんとは」

彼はそんな私に視線を向けた。彼に笑みはなかったが、その眼差しは優しかった。

全てを知ったうえでの質問。遠い昔、まだ幼かった頃にもこんな眼差しを向けられたことがあった。我慢していたことを、親には言えずに我慢し続けていた時、私は母にそのことを知られてホツとした。肩の荷が下りたかのように気持ちが軽くなった。そして安堵から号泣した。

五十を過ぎて、まさかこんな、あの時と似た気分を味わうとは思ってもみなかったが、この訳の分からない出来事からは救われた思いがしていた。

「…そうなんです」

私の安堵にも似た声に彼は笑みを浮かべ、再び写真に視線を落と

した。

「私には」

彼の静かで優しい声。

「我が儘で、淋しがり屋のくせに強がって…、でも、いつも包み込んでくれるような優しさを持つ…、一生懸命な人」

…優和だ。

「まあ、そんな女性に見えているんです」

「あの…、私も以前はそう見えてたんです。あなたの言ったそのままの女性に」

「ほう、それは奇遇ですな。でも、私が見ている女性と、あなたのその女性とは、おそらく、全く違う女性でしょう。なんせ私のは四十年も昔のことですから」

確かに。

「あなたが由奈ちゃんに見ていた女性は、確かに今もあなたが想い続けている女性の姿だった。ところがこの写真には別人が写っている…」

「はい」

「でもどうしてなんですか？ どうしてこんなことが起きるんですか？」

「それが、私にも本当のところは分からないのです。ただ私もあなたくらいの頃に、ある人に言われたことがあるんです」

「その人の説明によると、時として神は由奈ちゃんのような特別な人間をこの世に生み出すそうなのです。過去に大切な人を失い、いつまでもその人のことを強く深く想い続けている人が、その特別な力を持つ人に出会う時、この現象はごく簡単に、そしてごく普通に起きるそうです」

「私達も失った大切な人に似た人と出会うと、その人に面影を求めてしまいますよね。見かけただけでもハツとするでしょう？ でもその人は似ているだけでやっぱり別人。見れば見るほど、知れば知るほど、顔も声も仕草も、もちろん性格も違う…。当然なんです」

ね」

「特別な力を持たない普通の人間同士ではこの程度なのです。しかし、由奈ちゃんのような特別な人間との場合はその力が強いいため、私達普通の人間には、その人の顔も声も、自分の想い続ける人に見えたり聞こえたりしてしまうんです。想いが強ければ強いほど、深ければ深いほど、これは時折ですが、仕草までもが想い人自身と重なって見えるんです。」

それで由奈が優和に見えたのか…。

「まあ、さすがに性格までは変わることはありませんがね」

私を見る彼の笑みは、「残念ながら」と言っているようだった。

「じゃあ、あなたが言った女性って…」

「はい。先ほど述べたこの写真の女性は、私が今も愛し続けている人です」

彼は懐かしそうに写真を見つめた。

「ただ」

おもむろに彼が私に振り向く。

「それはあくまでも、『この人は自分が想い続けている人とは違う人なんだ』と自覚していられることが前提となります。」

「ど、どういうことですか？」

彼は半ば継るような私に微笑むと、再び写真を見つめた。

「かつてあなたはその女性を愛し、そして今も変わらず愛し続けている。その想いは今この時も、あなたはその女性に寄せられていると思っているに違いない。」

「はい」

「しかし残念ながら、その女性に寄せているはずのあなたの想いは、由奈ちゃんに出会ったことで、実はその女性ではなく由奈ちゃんに寄せられていたのです。あなたの想い続ける女性に何から何まで瓜二つの由奈ちゃん自身に、自分でも気付かぬうちにね」

そんな…。

「それは半年前からなのか、一週間前からなのか、もしかしたら今

日からもしれない」

彼の声が遠くで響く。

そんなはずはない。確かに私は由奈に心魅かれはしたが、それはあくまでも彼女が優和にそっくりだったからで、由奈本人に心魅かれたわけではない。なのに優和を想っていたはずが由奈を想っていたって？ そんな馬鹿な…。

由奈に出会って自分の愚かさに気付いた時も、私は由奈ではなく優和を想っていた。そしてもう二度と優和を思い出になんかしないと誓った。

由奈に出会ってからのこの一年、その当時流行った曲を耳にするのと、思い出を懐かしむような気持ちではなく、その頃の想いが、ドキドキした感情が現在進行形で甦ってきていた。それが優和の好きだった曲、カラオケでよく歌った曲、優和がきっかけで好きになった曲、一緒に聴いた曲といった思い出の曲であるならばなおさらだった。だから私はそれらの曲を集めあさった。そしてそれら思い出の曲達は、殺伐とした日常において、現在進行形の感情とともに唯一私を若返らせてくれていた。

…今だって想いを寄せているのは優和にだ。

相変わらず彼の声は遠くで響いている。しかし戸惑う私にはその言葉を受け止める余裕はなかった。

「あなたは誰に会いに、この店に来たのです？」

と、突然、彼の諭すかのような声。

そうだ…。

彼の言葉に私はハツとした。

確かに、一年前の私にはまだ、「この娘は優和じゃないんだ」という思いが由奈に対してあった。だからたとえ再会に期待しても、それは所詮、「またいつか、機会があつたら」という程度だった。でも今日の私は、あきらかに由奈がいるからこの店に行こうと思つた。そしてこの店に行く時の私は、由奈という名の優和、すなわち由奈本人で満たされていた。

そうか、私は由奈に会いにここへ来たのか…。

じゃあ、曲を聴いてドキドキしたのも、実は優和とだぶらせた由奈にだっただってことか…。

なんてことだ、“現実に存在する優和”を想うようになっていたなんて…。

「理解出来ましたか？ 写真の女性があなたの知らない人になっている訳が。でも、その知らない人こそが、おそらく本当の由奈ちゃんなんでしょうね」

「想いが強ければ強いほど、深ければ深いほど、追い求めれば追い求めるほど、この錯覚に陥るそうです」

「……………」

不思議で現実離れた、到底信じられないような出来事ながら、私は自分自身の自惚れを思い知らされ、自己嫌悪の中、そんな自分を悔やんだ。

「ごめん、優和。と。」

「安心して下さい。原因が分かった以上、由奈ちゃんを忘れ、以前のように想い続ければ、この写真もあなたのその人とのスリーショットに変わりますから」

「そう…ですか」

「元気を出しましょう」

シヨックを隠せないでいる私の肩に、彼はそっと手を置いた。

「実は私もなりましたね」

「あなたも ですか？」

「はい」

彼は優しく微笑んだ。

「私も所詮はそんなものです。分かっているはずだったのに、いつの間にかその人自身にのめり込んでしまっただけです」

「そういうものなんですかねえ…」

「そういうものなんです」

「でも…、不思議ですね」

「本当に…」  
彼はしみじみと頷いた。

おそらく私の自己嫌悪が晴れることは、この先もうないのだろう。でも彼を見ていて、それもまた良しと思えた。彼も今の私のように自己嫌悪に陥ったはずだ。なのに彼が彼女を今もまつすぐに想い続けることが出来ているのは、きっとその時の自己嫌悪が今もそうさせているに違いない。

今日の自己嫌悪とともに生きていく。私も彼と同じように。そう思うと、私は彼に親近感が芽生え、もう少しこの不思議を知りたくなかった。

「ところで、これは特別な人間同士でも起きるんですか？」

「理屈ではそうなると思うのですが、私が聞いたのはここまでなんです。ただ、特別といってもその力は普通の人よりほんの少しだけ強いといった程度なので、本人ですらその力には気付かないことがほとんどなんです。『誰々に似ている』とか『そっくりだ』とか、よく言われるなあと感じるくらいで」

「そうかあ…。」

これからもっと、色々聞こうと思った矢先に、これ以上とは…。でも、彼がこれ以上のことを話してもらっていないのは、きっとこれで十分ということだからなのだろう。

「あの、その特別な人間には男性とか子供も存在するんでしょうか…。」

それまで私達のやりとりをやはり興味深く聞いていたママが、切実な顔でカウンターから身を乗り出すように話に割って入った。

「ああ、それなら聞いてます」

「もちろんいます。生まれた時からこの力は備わっているそうですから。ですから、子供に大人を、大人に子供を見ることは出来ませんし、男性に女性を、女性に男性を見ることも出来ません。また、



若者に老人、老人に若者も出来ません。あくまでも同性で同年代でなければなりません」

「じゃあ、同性で同年代の人を探せば」

「残念ですが、探すのは不可能です。出会ってしまえばごく簡単に、ごく普通に起きる現象ですが、出会うのは奇跡に近いわけですから」

「そうですか…」

俯いたママの表情が、一瞬曇ったように見えた。

「でも…、もしかしたら由奈ちゃんは自分の力に気付いてたのかもしれないよ」

え？

「だから写真を置いて姿を消したんじゃないやありませんか？ 考えてみれば、この力は本人にとっては迷惑なのかもしれません」

なるほど…。

「ごめん、ママ。この人と同じのを二つ貰える？」

私は空になった彼のグラスに視線を向けた。

「あ、いや、悪いですよ」

「おごらせて下さい」

人にはそれぞれの過去がある。だからママにも当然それはある。おそらくは辛い過去が…。それでもママは接客業のプロとして、私の注文に明るく「はい」と微笑んだ。

プシユ。

開けた缶ビールを片手にホテルから眺めた夜景は、全盛を誇っている。

テーブルには空の缶が六本。

別に飲み足りなかったわけではない。ただ、彼と二時間程グラスを交えてルーベを後にした私は、改めて一人になってみると、ほんの少し前のことを夢であってほしいと強く願い、コンビニに足を向けていた。

今私の左手にある七本目は、とにかく酔い潰れてその願いを実現しようとした結果だった。

そういえば…、確か保坂も優和を見ていたんだよな…。

「それじゃあ、あいつもずっと…」

なのに「独身の方が気兼ねなくていい」なんて言っつて、今まで自分の気持ちをずっと押え付けてきたのか…。

パブスナック“ルージユ”。当時、保坂の行きつけだったその店に優和はいた。保坂に誘われ、仕方なくその店を訪れた私だったが、そこで優和に出会うと一目で恋をした。しかし告白をする勇気のなかった私は、優和の「想い続けている人」が自分だとも知らず、ずっと片思いを決め込んでしまっていた。

そんな中、私よりも早くに優和と出会い、そして既に告白をしていた保坂は、やがて優和の気持ちに私にあることを知ると、それ以来優和への想いを口にしなくなった。

「苦しかったろうな…」

「そうとも知らずに私は…」。

「…すまん、保坂。」

私は二十年経って初めて保坂の想いを知った。

「じゃあ、そろそろ本題に入るか」

保坂が切り出した。

横浜のこじんまりした洒落たカフェ。私は保坂に、「写真のことは会って説明する」と、写真と同封のメモで告げていた。

もう、三十分になるだろうか。あの旅行以来の再会に、私達はすっかり話し込んでしまったものの、何故かお互い気を使うかのようになかなか本題を切り出せないでいた。

「なあ」

保坂が写真をテーブルに置いた。

「ここに写ってんの誰だ？」

今まで笑顔だった保坂は怪訝な顔で指差した。

「ああ」

私はこの期に及んで一瞬ためらったが、改めて意を決すると、有りの俣を話し始めた。

「実は、これな」

話の間、保坂は終始予想したとおりの反応を見せていた。まあ、当然といえば当然なのだが、私にはそんな保坂がとても愛おしく思えてならなかった。五十過ぎの男が五十過ぎの男にこんな感情を抱くなんて、他人が知ったらどう思うか知れない。しかしそれでも自分と“想い”を同じくしていた目の前の五十男にそう思った。

「そうだったのかあ…」

「ああ」

全てを知った保坂は瞼を閉じるとそのまま俯いた。

「そうかあ…。じゃあ…。とうとう知られちゃったか」

「ああ」

溜め息混じりで私を見た保坂の顔には、照れと安堵の表情が同居していた。

「黙っていてすまなかった」

「俺の方こそ。辛かっただろ？ 今まで」

「…仕方ないさ」

保坂はそつと微笑み、何処か遠くを見つめた。

「…なあ、…あの娘は」

遠くを見ていた保坂の視線が私のもとへと戻る。

「あの娘は俺達にとつてなんだったんだろうな」

「…俺にも分かん」

「そうだな」

保坂は納得の笑みを浮かべた。

「でも、不思議なこともあるもんだな」

「本当に…」

「いらつしやいませ」

昔を思わせる佇まいに誘われ、思わずそのドアを開けた旅先の店。カウンターの隅に腰を落ち着けた私は、その雰囲気に浸った。

「なににします？」

「ロツクを」

「はい」

カラオケの鳴り響く中、ママは支度にかかった。突き出しが出され、ロツクアイスの割られる音。

「おまちどうさま」

コースターに置かれたグラスの中で氷が踊る。

フロアでは若い娘が黄色い声で接客していた。昔が蘇る。

「珍しいね、今時こういう店は」

グラスを一口した私は、辺りを見渡した。

「そうなんです。でも意外と人気なんですよ」

二十年の歳月は私を老人と呼ばせる年齢にしていた。近頃ではめつきり酒の量も減り、また、かつて私が通っていたようなこの店の店も少なくなつて、私はここ数年、酒場から遠ざかつていた。

定年後、旅行を趣味としていた私が偶然見付けたこの店は、何故か優和の面影を探し求めさせた。何処を捜そうとも、優和がいるわけではないのに、そんな思いに駆り立たせる店だった。

由奈とは結局あれ以来会うことはなく、あの土地の人間ではなかったことを耳にただけだった。

「お客さんて、雰囲気があの人に似てらつしやいますよね」

私の後に来た中年の客にビールを出し終えたママが微笑む。

「あの人？」

「そう、なんて言ったかしら、昔の俳優で外国人の」

「そうそう、シヨーン・コネリー」

「シヨーン・コネリー？ 随分古い人を知ってるんだね」

「好きなんですよ、昔の映画が」

「ほう、道理で」

シヨーン・コネリーか……。私にもそんなことがあったな。

保坂は五年前に優和に会いに逝った。不慮の事故とはいえ、今頃は優和とグラスを交わして楽しくやっていることだろう。結局私はまたしても保坂に先を越されてしまったわけだ。

えっ、お前はまだ来るなって？

まあ、そう言うな。

俺もじき行くから、そんな時はちゃんと混ぜてくれよな。

この店は、居心地がよかった。

「いらっしやいませ」

これでカウンターには三人。新たな客は五十代といったところか。ママがその客のもとへと向かう。

「ビールを」

「中山さん ですよね」

「はい？」

中山？

珍しいな、このような場所で同じ名字の者に会うなんて。

「驚きましたか？」

「ええ。名前、覚えてたんですか？」

「覚えていたというよりも、覚えさせられたってところかな」

「覚えさせられた？」

「ええ」

「ちょっと待ってて下さいね」

ママは奥にある部屋へと姿を消すと、すぐに茶の封筒を手に戻ってきた。

ん？ これは…。

「ごめんなさいね、話を中断させちゃって」

あの時と同じ…。

「実はこれを預かってたの。由奈ちゃんから」

由奈？

まさか…。

「でも由奈ちゃんね、『今度中山さん達が見えたら渡して下さい』って言って、その日に辞めちゃったの。もう一年近くになるかな。やっぱりそうだ。」

…あの時と同じだ。

「それで私の顔と名前を覚えてたんですね」

「そうなの」

「見てもいいですか？」

「どうぞ」

…じゃあ、彼もあの不思議を体験したのか。

彼もまた、想い続ける人がいる。私は、「話さなければ」、そう感じた。それは使命感というよりは、むしろ同じ経験をした者としての義務感のようなものだった。

「よく撮れてるでしょう。珍しいんですよ、あの娘が写真を撮らすなんて。中山さん達が初めてじゃないかな。他のお客さんにはどんなにせがまれても絶対に撮らせなかったから」

私は席を立った。

「ママ…、この娘って…」

「どこかしました？」

「あ、いえ…」

「隣、いいですか？」

『ついでに』

完

『ついでに』



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5869j/>

---

ここにいるよ。

2010年10月8日15時06分発行